# 令和3年度 学校評価総括表（その1）

奈良県立生駒高等学校

| | | |
|---|---|---|
| 教育目標 | 自立した社会人の育成を目指して、「知・徳・体」の調和のとれた豊かな人間性を育み、心身を鍛えることによって一人ひとりが高い志をもって目標達成に向けていきいきと行動ができる生徒を育てる。 | 総合評価 |
| 運営方針 | ・「夢を現実（かたち）に」を合い言葉として、生徒の自己実現を教職員が一丸となって支援する。　・限られた時間を有効に使い、文武両道の実現ができる生徒を育てる。 | |

| 令和2年度の成果と課題 | 本年度の重点目標 | 具体的目標 | |
|---|---|---|---|
| 令和2年度は、新年度当初より新型コロナの感染対策を行いつつの教育活動であった。在宅教育期間では、試行錯誤しながらも生徒への授業動画の配信を実施し、新しい授業の創造に挑戦した。その取り組みは、在宅教育期間後に、授業でのICTの積極的な活用という形であらわれた。生徒の生活習慣は安定しており、遅刻数も少ない。しかし、各学年に不登校傾向を示す生徒が見られ、彼らのために、さらに家庭と連携することやスクールカウンセリングの活用が必要である。進路実績は良好な結果となった。特に第3学年は英語外部検定を継続して受検した結果、学力向上に向けての意識を高くして受験を乗り切った。国公立大学への合格者も増加した。さらに学力を伸ばすため、学習時間の確保や家庭学習の定着を図る方策を全職員で共通理解し実践することが必要である。 | 目標に向かうための生活習慣を確立させる。 | ・手帳を活用し、自己管理のできる生徒の育成を目指す。・生徒の健康管理に努め、欠席・遅刻・早退をなくすことを目指す。・生徒の学習環境の整備及び安全確保に努める。・ノーチャイムや読書旬間を活用する。・基本的生活習慣を確立し、挨拶やマナーに対する意識の向上を目指す。 | B |
| | 学習習慣の定着を図り、主体的・対話的で深い学びによる学力の向上を目指す。 | ・主体的な学びにより、学ぶ意欲や学力の向上を図る授業改善を行う。・思考力や判断力、表現力を育てる指導を行う。・手帳を活用し、授業外の学習時間を増やすとともに、記述力の向上を図る。・学習スペース「Let's Study ミライコマ」の活用を図る。・英単語テストの充実を図る。・模擬テスト・総合学力テストの事前・事後の学習の充実を図る。・家庭学習を習慣化し、その定着を図る。 | |
| | 生徒の自己理解を高め、進路意識の向上による進路実現を目指す。 | ・「進路の手びき」の活用を図る。・学校内外での高校生の活動に積極的に参加する生徒を育成する。・個人面談の充実を図るとともに、充実した進路情報の伝達を図る。・各種検定試験に積極的に挑戦する態度を育成し、学びの主体性を育む。 | |
| | 学習と部活動の両立を図れる指導を目指す。 | ・学習指導と部活動指導の連携を図る。・部活動への参加を奨励し、効果的な指導の工夫をする。・部活動の効率化を進めるとともに、時間厳守の姿勢を育てる。・部活動を通して、逞しい体を養い、豊かな心を育成する。・時間を大切にし、自主性・自律性を育む部活動の充実を図る。 | |
| | 地域への愛着を持たせるとともに、豊かな人間性の育成に努める。 | ・挨拶の励行を推進する。・「総合的な探究の時間」・「奈良TIME」の充実を図る。・地域活動や社会活動に積極的に参加する生徒を育成し、「地域と共にある学校づくり」を推進する。・あらゆる機会をとらえて人権意識の向上を図る。・国際理解に努め、幅広い視野と豊かな人間性を育成する。・教育活動の積極的な情報発信に努め、広報活動を充実させる。 | |

| 評価項目 | 具体的目標（評価小目標） | 具体的方策 | 評価指標 | 中間期（9月） 自己評価 | 中間期（9月） 進捗状況 | 年度末（3月） 自己評価 | | | 成果と課題（評価結果の分析） | 改善方策等 | 学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第1学年 | 基本的な生活習慣を確立し、規範意識を高めさせる。 | 遅刻や課題の提出遅れの防止に努める。また、服装や頭髪など身だしなみを整えさせる。整理・整頓・清掃を充実し、学習環境を整えさせる。 | 遅刻の各クラス別年間総数の平均<br>〇50回未満：A　〇70回未満：B<br>〇90回未満：C　〇90回以上：D | A | 第1学期の遅刻回数は、クラス平均8.0回であった。 | A | | B | これまでの遅刻回数は、トータルで258回である。学級平均は28回少しである。年間平均として50回を超えることはない。 | 遅刻回数の多い学級も、特定生徒の度重なる遅刻が平均を押し上げているので、個に応じた指導で対応していく。 | 入学生徒について、勉強のみでなく、部活動をも重視した指導で、80%以上の生徒が部活動に加入しているという実績は素晴らしい。今後も良き伝統として継続してもらいたい。<br>平日の授業時間外学習時間が少ないことが気になる。時間を有効活用するため、今未来手帳を有効に活用し、まず、記録することの習慣づけをしっかり指導して欲しい。 |
| | 基礎学力を身に付け、家庭学習の充実を図る。部活動や学校行事に主体的に取り組ませる。 | 文化系・体育系・部局を合わせ部活動加入率70%以上の維持を目標とし、学習活動と部活動の両立を目指す生徒を育てる。 | 部活動の加入率<br>〇70%以上：A　〇65%以上：B<br>〇60%以上：C　〇60%未満：D | A | 体育系233、文化系88で合計321名加入。率にして約89%であった。 | A | C | | 体育系208名，文化系81名で合計289名が活動を継続している。加入率は84%である。 | 学校生活の柱の一つとなっているので、生徒にとっても教員にとっても持続可能なものであるよう努める。 | |
| | | 授業を大切にし、基礎学力を身に付け、宿題・予習などを含めた家庭学習の習慣を身に付けさせる。 | 学力が向上していると思っている生徒が<br>〇70%以上：A　〇60%以上：B<br>〇50%以上：C　〇50%未満：D | C | 向上していると思っている生徒は、196名で、率にして約54%である。 | C | | | はっきりと向上したと自覚ある生徒は33名、やや向上したと思う生徒は155名、合計188名で率にして50%を超える程度である。 | ベネッセの総合学力テストを活用して、全国的な位置づけの向上が自らの進路実現にもつながることを意識させ、それをモチベーションにしていけるよう働きかける。 | |
| | | | 平日の授業時間外学習時間平均が<br>〇2時間以上：A　〇1.5時間以上：B<br>〇1時間以上：C　〇1時間未満：D | D | 2時間以上学習している者は35名、1時間以上で見ると88名、ほとんどしていない者が240名。 | D | | | 2時間以上学習している生徒は50名、1時間以上が78名、しかし1時間未満が215名である。 | | |
| | 自らのキャリアプランについて、しっかり考える姿勢を育む。 | 自らの興味・関心に基づき、適性を探り、進路についての考えを深めさせる。 | LHR、「今未来手帳」、「ポートフォリオ」を活用し、進路についての考えが深まったと自覚した者が<br>〇70%以上：A　〇60%以上：B<br>〇50%以上：C　〇50%未満：D | － | アンケート未実施 | D | B | | 自己管理や振り返りができると自覚ある生徒は30名、そういう自覚がない生徒が173名となった。 | 「今未来手帳」も「ポートフォリオ」（キャリア・パスポート）も活用するためには、まず記録することが重要と考える。その第一歩として、書き込むことの習慣づけである。 | |
| | | 「学年だより」を配布するなどして啓発に努め、進路目標やその他の目標など、目的意識を持たせ、自己実現に向けて地道に努力させる。 | 「学年だより」を<br>〇各学期に1回以上（年間に4回以上）配布：A<br>〇年間に3回以上配布：B<br>〇年間に2回以上配布：C<br>〇年間に1回以下：D | A | 入学時、中間考査返却時、第1学期三者面談時の3回発行できている。 | A | | | 入学時、第1学期中間考査返却時、第1学期三者面談時、第2学期中間考査返却時、第2学期三者面談時の4回発行し、学年末考査時には各教科からのメッセージ主体で発行する。 | 3年間を見通した「夢を現実（かたち）に」に基づいて、生徒や保護者に働きかける内容であるよう留意し発行する。 | |
| 第2学年 | 規範意識と基本的な生活習慣を確立させる。 | 規則正しい生活を心がけ、心身の健康を保ち、遅刻・欠席なく、授業に集中できる姿勢を養う。特に不注意や寝坊を原因とする遅刻の減少を目標に指導する。 | 遅刻の各クラス別年間総数の平均<br>〇50回未満：A　〇70回未満：B<br>〇90回未満：C　〇90回以上：D | － | 第1学期の遅刻回数は、クラス平均18.1回であった。 | B | | B | 第2学期の遅刻回数は、1学期より11.9回増えて30.0回であった。心身に不安のある生徒数名が、遅刻をしながら登校できている。特定の生徒が、不注意の遅刻を重ねている。 | ほとんどの生徒は基本的生活習慣が身に付いているが、始業ぎりぎりに登校する生徒や、授業の準備の遅い生徒もいる。あいさつや、身だしなみ（制服の着こなし）等にも、学年全体で指導を続けたい。 | 平日の授業外学習時間が、1年時より増えている。部活動と両立させながら、学習時間が増加していることは、1年からの家庭学習の習慣化の指導の賜物と考えられる。<br>進路を決定する時期であるが、オンラインでのオープンキャンパスでは現実味のないものと感じている生徒もいる。3年生に進級した年度当初、より具体的な受験プランを作成できるような指導をお願いする。 |
| | 学力の向上を目指し、充実した学校生活を送らせる。 | 部活動の加入率70%以上の維持を目標とし、学業と部活動の両立が図れるよう指導する。 | 部活動の加入率<br>〇70%以上：A　〇65%以上：B<br>〇60%以上：C　〇60%未満：D | A | 73%の生徒が、文化系、体育系の部活動に参加している。 | A | B | | 70%の生徒が、文化系、体育系の部活動に参加している。部活動を辞めた生徒の事情や、その後の時間の使い方を確認して指導したい。 | 部活動を通じて、充実した学校生活を送っている生徒が多い。その一方で、学習時間の確保が不十分な生徒もいる。しっかり両立させ、引退まで部活動を継続して欲しい。 | |
| | | 基礎学力の充実と応用力の醸成を図るために、家庭学習の習慣を身に付けさせる。 | 平日の平均授業時間外学習時間が<br>〇2時間以上：A　〇1.5時間以上：B<br>〇1時間以上：C　〇1時間未満：D | C | 平日の家庭学習時間は、平均40分であった。<br>その他自宅外での学習時間は平均37分であった。 | C | | | 平日の家庭学習時間は平均44分，その他自宅外での学習時間は平均41分であった。やや増加しているが、家庭学習は不足している。 | 学習内容が定着しておらず、総合学力テストの結果も低迷している。日々の学習を大切にさせながら実力を向上させ、進路実現に向け学習時間を増やす指導をしたい。 | |
| | 自分の将来を見つめ、目標達成のために努力する姿勢を育てる。 | 『今未来手帳』を活用し、自らの興味・関心に基づく、適性を探り、確かな進路目標を持ち、実現に向け努力する生徒を育てる。 | LHRの時間や手帳を活用し、第2学年の間に進路目標が定まった者が<br>〇70%以上：A　〇60%以上：B<br>〇50%以上：C　〇50%未満：D | － | 進路目標は、ベネッセ総合学力テストの志望大学等のデータによると、ほとんどの生徒が具体化している。 | B | A | | 新学年の類型科目選択が終わり、進路目標が明確化している。<br>今未来手帳の活用は個人差が大きい。 | 1年生時より新型コロナウイルス感染症予防対応で、オープンキャンパス等もほとんどオンラインで、実感が少ない。3年生では年度当初からさらに具体的な進路目標を見つけさせ、早期に受験プランを計画させたい。 | |
| | | 「学年だより」を配布して啓発に努め、目的意識を持たせ、逆算の発想で自己実現に向けた地道な努力を重ねるよう指導する。 | 「学年だより」を<br>〇各学期に1回以上（年間に4回以上）配布：A<br>〇年間に3回以上配布：B<br>〇年間に2回以上配布：C<br>〇年間に1回以下：D | － | 第1学期に、学年だよりを2回発行した。 | A | | | 第2学期末までに、学年だよりを4回発行した。保護者アンケートの結果では、約7割の保護者が、学校の様子が伝わっていると感じておられる。 | 生徒の自己実現のために、進路指導部と協力して長期的な継続した指導を計画的にすすめる必要を感じる。また啓発には、学年だより、Google Classroom、Webページなど様々な媒体を活用していきたい。 | |

# 令和3年度 学校評価総括表（その2）

奈良県立生駒高等学校

| 評価項目 | 具体的目標<br>（評価小目標） | 具体的方策 | 評価指標 | 中間期（9月）<br>自己評価 | 中間期（9月）<br>進捗状況 | 年度末（3月）<br>自己評価 | | 年度末（3月）<br>成果と課題（評価結果の分析） | 年度末（3月）<br>改善方策等 | 年度末（3月）<br>学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第3学年 | 個々の生徒が目標に向かうための生活習慣を確立させる。 | 受験期に起こる生活の乱れや心身の不調に注意し、保護者をはじめ関係機関との連携を図る。授業の重要性を伝え啓発し、遅刻・欠席をせず授業に集中して取り組む姿勢を養う。不注意や寝坊を原因とする遅刻の減少を目標に指導する。 | 遅刻の各クラス別年間総数の平均<br>〇50回未満：A　〇70回未満：B<br>〇90回未満：C　〇90回以上：D | － | 1学期の遅刻回数は学年全体で114回で，1学期のクラス平均回数は14.3回であった。 | C | B | 2学期を含めた学年末の遅刻回数は学年全体で、631回でクラスの平均は78.9回とかなり多くなった。進路決定した生徒の気の緩みによるものや、学業や進路の悩みなどにより遅刻をする生徒が2学期急増したと思われる。 | 遅刻の防止については、規則正しい生活、主体的に行動できるよう指導してきたが、徹底できなかった。学業や進路の悩みによる遅刻や欠席する生徒へのケアが受験期には特に必要であると思われる。 | 生徒は受験に向けて学習時間を増やし、学力を向上させている。しかし、大事な時期に、オンラインでの授業となり、不安を感じていた生徒も多数いたのではないか。そのような状況でも、今年度の進学結果は例年より良好であると聞き、先生方の苦労が推察される。「学年だより」等の啓蒙活動、今後もより有効な手段はないかを検討して欲しい。 |
| | 学力を向上し、進路希望に応じた学習を深め、充実した学校生活を送らせる。 | 基礎学力の充実に加え、発展的な内容に取り組む態度を育てる。効果的な授業改善を行うとともに、進路希望を見据えた授業外学習に積極的に取り組ませる。また、放課後や長期休業中に開かれる実力養成講座への参加など、学力伸張に向けての努力を促進する。 | 学力が向上していると感じている生徒が<br>〇70%以上：A　〇60%以上：B<br>〇50%以上：C　〇50%未満：D | A | 1学期生徒アンケートでは「そう思う」約35%、「ややそう思う」約47%で、8割の生徒が向上したと回答した。 | A | B | 2学期生徒アンケートでは「そう思う」約40.7%、「ややそう思う」約45.7%で、約86.3%の生徒が向上したと回答した。受験勉強が進んだことにより、1学期よりも比率が上がったと思われる。 | 2学期中に進路先が決定する指定校推薦を含めた四年制大学等の学校推薦型入試を受験する生徒について、進路決定までは学習に積極的に取り組んだが、進路決定後、一部の者は集中力を低下させた。先を見据え、自己の学力向上に取り組ませる日常の指導が必要であると思われる。 | |
| | | | 平日の平均授業外学習が<br>〇3時間以上：A　〇2時間以上：B<br>〇1時間以上：C　〇1時間未満：D | C | 1学期生徒アンケートでは平均1時間10分であった。 | C | | 2学期生徒アンケートでは平均約1時間50分であった。1学期よりも受験勉強を中心とした学習時間が増加したと思われる。 | | |
| | 自己の将来を見つめ、目標達成のために自ら努力する力を養う。 | 進路目標、部活動目標など、目的意識を持たせ、自己実現に向けて地道に努力させる。生徒、保護者に卒業後の進路についてより深く理解してもらうため「学年だより」などを発行し、進路情報の提供に努める。 | 「学年だより」を<br>〇各学期に1回以上（年間に4回以上）配布：A<br>〇年間に3回以上配布：B<br>〇年間に2回以上配布：C<br>〇年間に1回以下：D | － | 学期に一度の発行を予定している。すでに1学期の学年だよりは発行済みである。 | B | | 学年だよりは、各学期に一度発行した。進路関係の内容や連絡事項が主な記事とし、できるだけ時期に即した内容になるよう心掛けた。活字離れで、生徒があまり読んでいない現状なので、方策を考える必要があると思う。 | 学年だよりの記事は、進路関係の内容や連絡事項がどうしても多くなってしまう。発行ごとにいつも悩むところであるが、卒業後に必要とされる内容を含んだ記事を心掛けたい。より生徒に読ませるようにするには、Google Classroomでの配信も必要と思われる。 | |
| 総 務 | 学校運営が円滑に行えるように対処する。各種出版物、学校説明会、授業公開等を充実したものにする。 | 各分掌と連携し、儀式等の円滑な運営を目指す。 | 儀式等に関するWebページ掲載の質・量が昨年より増：A、同程度：B、減：C、大幅減：D。 | B | 儀式が縮小されたこともあり、Webページの掲載は少なめである。2学期以降増やしたい。 | B | B | 各分掌の協力を得て、儀式等を円滑にすすめることができた。主要な儀式等の様子はWebページで紹介することができたが、掲載総数は若干減少した。 | 学校の様子を発信するよう逐次Webページ掲載を行う。 | 今年度も学校説明会が、e-オープンスクールという形態となり、現場では苦労されたのではないか。<br>コロナ禍で、学校行事が縮小となり、Webページの記事が少なくなっているが、今後も逐次、ページの更新をお願いする。<br>PTA活動について、感染症対策を行ったうえで実施可能な取組があるか検討してもらいたい。 |
| | | 学校経営計画、学校案内リーフレットなどを作成する。学校説明会を円滑に進め、中学生・保護者に本校の方針等を理解してもらう。中学校等への積極的な情報提供を図る。 | 学校説明会でアンケートを実施し、「たいへんよく理解できた」「理解できた」の割合が<br>95%でA、80%でB、60%でC、60%以下でD。 | － | 学校経営計画、学校案内リーフレットを作成した。本年度学校説明会は、e－オープンスクールでの開催である。情報図書部に協力をいただき、動画等を作成できた。 | A | | 学校説明会はe－オープンスクールで開催できた。1月末現在335名の申し込みと1件の問い合わせがあった。アンケートの結果「たいへんよく理解できた」「理解できた」の割合は100%だった。 | e－オープンスクールでの開催は心配な点は多かったが、「理解できた」の割合が100%であったことは一安心であった。次年度はe－オープンスクールとともに学校開催も考えたい。 | |
| | PTA、樫葉会、樫木会活動を円滑に進める。 | PTA理事会、各部会等の取組を円滑に進める。WebページやPTA広報誌を通じて情報発信を行う。また、樫葉会、樫木会との連携を図る。 | PTA等の活動に関するWebページ掲載の質・量が昨年より増：A、同程度：B、減：C、大幅減：D。 | － | 広報誌「けんゆう」は、前期は発行せず、2月の発行のみの予定である。 | B | | 本年度はどの専門部も活動がほぼ中止となり、Webページの掲載もほとんどできなかった。PTA広報誌が1回発行された。 | PTA活動に積極的な保護者も多く、次年度は昨年度と同様に活動したい。そして、Webページの掲載を質・量ともに増やしたい。 | |
| 教 務 | 基礎学力の充実に努めると共に発展的な学習にも目を向けさせ、確かな学力の養成に努める。限りある時間の有効活用を考え、学習習慣の定着を図る。 | 各人、年に1度は自身の教科の授業と、他教科の授業の授業参観の機会を持つ。 | 授業参観への参加率<br>〇90%以上：A　〇80%以上：B<br>〇60%以上：C　〇60%未満：D | C | 1学期（6月）の授業参観参加率は62%と低調であった。新しい授業の手法や情報機器を取り入れた授業等を互いに学び合える環境つくりに努めたい。 | C | B | 2学期（11月）、他教科の授業参観参加率は、51%に下がった。どちらかの機会に参加された先生方の割合は73%である。 | 「主体的・対話的で深い学び」をすすめていくため、知識や技能を習得させるだけではない新しい授業形態等の提案をしていきたい。 | 今年度は、オンライン授業という、新しい授業形態に挑戦され、苦労が多かったと思う。今後も見通しのつかない状況が続く可能性がある。より成果がある授業方法を模索して欲しい。<br>教員の授業力向上のため、来年度の授業参観の方法の検討をお願いする。<br>来年度から実施の新教育課程について、職員の情報共有を密にし、取り組んで欲しい。<br>総合的な探究の時間の実施に当たり、新しい教材の開発に努めてもらいたい。 |
| | | 予習・復習をして授業に臨み、計画的に学習に取り組む力を身に付けさせ、授業外学習の時間の充実を図る。 | 平日の平均授業時間外学習時間が<br>（1，2年生）<br>〇2時間以上：A　〇1.5時間以上：B<br>〇1時間以上：C　〇1時間未満：D<br>（3年生）<br>〇3時間以上：A　〇2時間以上：B<br>〇1時間以上：C　〇1時間未満：D | 1，2年D<br>3年C | 1学期生徒アンケートより、平均すると1，2年生は40分弱。3年生は1時間20分程度になる。3年生は、80%の生徒が2～4時間の学習をしている。 | 1年D<br>2，3年C | C | 1学期と比べて1年生は変わらず。2年生は少し学習時間が増えた。学年があがるごとに平均学習時間は増えてはいるものの、「ほとんどしない」生徒の数が1年生は40%程度いる。 | 具体的な学習目標を設定させ、授業に向かう正しい態度（予習・復習の重要性）や確かな学力をつける勉強姿勢を指導し、日々の学習習慣を定着させる取り組みが必要である。 | |
| | | | 学力が向上していると感じている生徒が各学年で<br>〇70%以上：A　〇60%以上：B<br>〇50%以上：C　〇50%未満：D | A | 1学期生徒アンケートより、学力が向上していると感じている生徒は、3学年ともに70%を超えている。 | B | | 2学期の生徒アンケート結果より、学力が向上していると感じている生徒は、3年生が86%、2年生が74%、1年生は55%だった。 | | |
| | 個々の生徒が目指す進路目標に応じた教育課程を編成する。 | 新学習指導要領実施に向け、年度内に教科主任者会を効果的に開催する。 | 開催回数<br>〇5回以上：A　〇4回：B<br>〇3回：C　〇2回以下：D | － | 新学習指導要領実施・BYOD導入が次年度に迫っているので、後半は具体的な内容を検討していきたい。 | A | A | 次年度に向け、教科主任者会、教科書選定委員会をはじめ、各教科ごとに新学習指導要領実施のための教科会議も数回開催した。先生方にはよく協力いただいている。 | 新学習指導要領が始まるので、教科内、教科間連携をより密にする必要がある。大学入学共通テストや社会の流れに応じて教育課程の見直しも必要なので、次年度も協力してすすめたい。 | |
| | | 新学習指導要領、観点別評価や高大接続研究会等に、教務部員は年1回以上参加する。 | 参加率<br>〇80%以上：A　〇60%以上：B<br>〇40%以上：C　〇40%未満：D | A | 今年度はオンラインでの研修や研究会がほとんどなので、全員が1回以上参加している。 | A | | 令和4年度入学生徒から実施の新学習指導要領では評価の方法、授業のすすめ方、生徒個人端末の導入等、大きな改革が求められているので、教務部員全員が積極的に研修に参加した。次年度に生かしたい。 | 新型コロナウイルス感染症の感染状況が落ち着いても、今後は多方面からの実践報告や研修会が配信の形で行われると予想される。移動時間が必要ないので、積極的に参加し、教務部が中心となって発信していく。 | |
| 企画推進 | 学習指導要領が定める「総合的な探究の時間を通じて生徒が身につけるべき力」を育む。 | 新たな校内指導体制に応じ、従来の目標・計画を変更し、内容の簡素化を進める。 | 年度末の生徒アンケート「GSの満足度」<br>〇80%以上：A　〇60%以上：B<br>〇40%以上：C　〇40%未満：D | － | 学級の枠を取り払い、生徒が希望する課題ごとに探究活動をグループ単位で実施することが事実上不可能となったなか、新たな方策を模索中である。3年生のディベート活動は質の高いプログラムを提供することができた。 | B | B | 「3学年分の『総合的な探究の時間』の取組の構築」の最終年度を終えた。試行錯誤を繰り返し、毎年改善を加えてきたつもりであるが、「探究」の目標達成という点からは、まだまだ満足できるものではない。今後もこれまでの取組に固執することなく、内容を深化させていきたい。 | 各学年に配置された企画推進室員が、推進室の計画・方針に基づき、当該学年の「総合的な探究の時間」の中心となる体制に切り換える。 | |

# 令和3年度 学校評価総括表（その3）

奈良県立生駒高等学校

| 評価項目 | 具体的目標<br>（評価小目標） | 具体的方策 | 評価指標 | 中間期（9月）<br>自己評価 | 中間期（9月）<br>進捗状況 | 年度末（3月）<br>自己評価 | | | 成果と課題（評価結果の分析） | 改善方策等 | 学校関係者評価（結果・分析）<br>及び改善方策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 生徒指導 | 基本的生活習慣の確立を図る。（挨拶・通学マナー・時間管理等） | コロナ禍でも実施できる活動を考え、通学路マナー、挨拶の励行推進を図る。<br>教員による校門指導を毎日行い、日々の登校指導を充実させ、服装・頭髪の点検や挨拶の奨励をする。 | 挨拶運動（生徒活動）を年間<br>10日以上：A　7日以上：B<br>5日以上：C　5日未満：D | － | 時差登校を実施しているため、現在のところ実施していない。 | － | E | C | 年間を通じて新型コロナウイルス感染症の感染予防を優先し、今年度は実施に至らなかった。 | 来年度は、感染状況に関わらず実施できる方法を考える。 | 遅刻数がかなり増加しているのが気になる。コロナ禍でも、生徒の生活習慣という根本的な部分を改善していくよう指導を継続して欲しい。今後はコロナの収束とともに、あいさつ運動や駅ターミナル指導を再開していただきたい。不登校をはじめとする「心の問題」が新たな生徒指導の課題となると考えられる。これからも生徒一人一人の理解を十分に図りながら、地域と様々な連携をはかり対応を進めて欲しい。 |
| | | 校外指導を充実させ、電車内、ターミナル指導を実施する。規範意識の向上を目指す。 | 校外指導を年に<br>6回以上：A 5回：B 4回：C 3回以下：D | － | 新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、現在のところ実施していない。 | － | | | 生徒指導協議会で計画されていた乗車指導は全て中止となった。時差登校実施時は毎日通学路を巡回し、通学マナーの向上に努めた。 | 来年度は、感染状況に関わらず実施できる方法を考える。 | |
| | | 不注意、寝坊等での遅刻回数の減少を図る。 | 年間延べ数<br>50回以上減：A　40回以上50回未満減：B<br>30回以上40回未満減：C　前年と同程度：D | － | 現在341回である。<br>一部の生徒が回数を重ねている現状がある。 | E | | | 1年生234回、2年生273回、3年生315回。合計822回である。一部の生徒が回数を重ねている現状がある。昨年度より増加しているため、その評価をEとした。 | 昨年度の合計数381回から大幅に増加している。昨年度は6月から全員登校が始まったことを踏まえても増加幅が大きい。生活習慣の見直しを指導していかなければならない。 | |
| | 教職員共通理解の下に生徒指導を行う。 | 生徒指導内規における、特別指導数を減少する。 | 年間特別指導数<br>5件以内：A　5件から10件未満：B<br>10件から15件未満：C　15件以上：D | C | 現在5件の特別指導をおこなった。<br>（携帯に関わる軽微な指導は除く） | C | | | 現在10件の特別指導（携帯に関わる軽微な指導は除く）を実施した。また、校内でのスマホの使用は半数以下に減少した。 | 来年度は、生徒への啓蒙活動を積極的に実施し、未然防止にもつなげる。 | |
| | 家庭や地域、関係諸機関との連携を強化する。 | 休業中の生徒心得や保護者宛文書を通じて啓発する。また、PTA家庭教育部の活動を通して連携を図る。 | 生徒心得及び保護者宛文書の発行を年に<br>○6回以上：A　○5回：B<br>○4回：C　○3回以下：D | C | 現在1回発行している。 | C | C | | 現在4回発行している。 | 社会の変化・変革に遅れることなく、事あるごとに啓発する。 | |
| | | 地域における巡回指導への参加を充実する。 | 年に<br>6回以上：A　5回：B　4回：C　3回以下：D | － | 新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、現在のところ実施していない。 | － | | | 全ての巡回活動が中止となった。 | 来年度、社会状況を見ながら例年通りの実施を検討する。 | |
| 教育相談 | 不安や悩みを抱える生徒に対し、適切な支援を行う。 | 報告、連絡、相談を基本に生徒の不安や悩みの状態を的確に把握し、適切な支援を行うためにスクールカウンセラーや外部支援機関との連携を密にする。 | 不安や悩みを抱える生徒の欠席日数が昨年度比で<br>○85%未満：A　○90%未満：B<br>○95%未満：C　○100%未満：D | E | 昨年度に続き非常変災の影響を考慮する必要はあろうが、長期欠席者数の増加により全体の数字としては約1.8倍、学年によっては10倍以上の増加が見られる。該当する生徒数に大きな変動はないものの、校内外にわたり更なる支援やケアが必要な生徒が増加している。 | E | | C | 数値上は最終的に前年度比1.1倍に落ち着いたが、2学期以降の休学・転学等によると思われる。依然、増加傾向は続いており、引き続きカウンセラーからの助言や継続的カウンセリングなどの手厚い対応が求められる。指標となる欠席日数が昨年度より増加しているため、その評価をEとした。 | 担任を中心に当該生徒と適切かつ緊密に関わることができるよう、カウンセラーとの連携を促進する。 | |
| | 多様な生徒に対して、心身の安定と自己実現を図る支援を行う。 | 教育相談及び特別支援に関して、生徒指導部の支援下で生徒の実態把握に努めると共に、スクールカウンセラーと学年・担任・関係部署等との連携をとる。 | 生徒アンケートにおいて、教育相談の取り組みが“自分のためになると思う”と“やや思う”をあわせて、<br>○70%以上：A　○60%以上：B<br>○50%以上：C　○50%未満：D | － | 2学期生徒アンケートにより評価の予定。 | B | | | ”自分のためになると思う”と”やや思う”とで、<br>・3年生の「セルフコントロール講習」では84.3%、<br>・「教育相談だより」では50.2%<br>の結果であった。 | スクールカウンセラーが、カウンセリング以外で幅広く生徒と関わることができる機会を継続的に模索する。 | |
| 進路指導 | 生徒個々が進路希望の実現を図れるよう学力向上に努める。 | 生徒一人一人を大切にし、その可能性を伸ばすために基礎学力の充実に努める。また、手帳などの活用により学習習慣の確立を促す。 | 生徒アンケートにおいて、進学講座を受講して効果を実感した<br>○80%以上：A　○70%以上：B<br>○60%以上：C　○60%未満：D | － | 結果報告は2学期生徒アンケートによる。 | A | A | B | 役に立った、役に立つ部分もあったを併せて89.8%であった。ただ、通塾率の上昇とともに受講者の数が少なくなってきており、講座内容などにも工夫が必要である。 | 満足度は高いので、部活動との両立が出来る参加しやすい実施方法を考案する。 | 生徒や保護者にとって、一番の関心事である進路について、進学講座を開設し、受講生の80%以上の生徒の役に立ったことはことは素晴らしい。塾利用者の増加による進学講座の受講者減もさることながら、経済的事情により塾を利用できない生徒や部活動と塾との両立が難しい生徒のためにも一層の進学講座の充実をお願いしたい。また、今未来手帳が単なるスケジュール帳にならないよう、より機能的に利用する仕組み作りをお願いする。 |
| | | | 生徒アンケートにおいて、毎日少しでも家庭での学習に取り組めた<br>○80%以上：A　○70%以上：B<br>○60%以上：C　○60%未満：D | － | 結果報告は2学期生徒アンケートによる。 | B | | | ほとんどしないと答えた生徒が24.5%でそれ以外は一応取り組めている。しかし、その内1時間以内が32.3%であり十分な取り組みになっていない。 | 課題の出し方や量に工夫を加えて、家庭での学習の習慣化を図る。また、スタディサプリの活用など取り組みやすい教材を与える。 | |
| | | スタディサプリの活用、校外模擬試験の実施等の授業以外の学習場面を提供する。 | 生徒アンケートにおいて、スタディサプリを活用して効果を実感した<br>○80%以上：A　○70%以上：B<br>○60%以上：C　○60%未満：D | － | 結果報告は2学期生徒アンケートによる。 | A | B | | 活用した生徒のうち、役に立った、役に立つ部分もあったを併せて82.3%であった。しかし、スタディサプリを契約はしたものの全く活用していない者が39.5%もいた。 | サプリ通信の定期発行により、活用意欲を刺激すると共に、未活用者の減少を図る。 | |
| | | | 生徒アンケートにおいて、模擬試験を受験後に「やり直し」をして活用できた。<br>○80%以上：A　○70%以上：B<br>○60%以上：C　○60%未満：D | － | 結果報告は2学期生徒アンケートによる。 | C | | | している、ときどきするを併せて67.4%であった。3年だけで見ると79.4%、2年だけでは67.1%、1年は57.1%と学年が下がるほどできていない。加えて、全ての割合が昨年より低くなっている。 | 1,2年生に対しては、自主性に任せるのではなく、課題としたが、思った効果が得られなかった。教科の評価に取り入れる等の強制性を加えるのも一案である。 | |
| | 進路情報を精選・充実させ、活用しやすい環境を整備する。 | 手帳の活用やポートフォリオのデジタル化を通じて、自己管理できる生徒、主体的に考え行動できる生徒を育てる。 | 手帳やポートフォリオのデジタル化によって、自己の振り返りができた。<br>○80%以上：A　○70%以上：B<br>○60%以上：C　○60%未満：D | － | 結果報告は2学期生徒アンケートによる。 | C | B | | できている、ときどきできているを併せて56%であるが、1年生で50%を下回っている。振り返りの重要性の周知がまず必要である。 | 求められる学力とは、単なる知識ではなく、「どんな高校生活を送り、何を考え、何を得、どう成長したか」であることを理解させ、そのための振り返りであることを進路実現に絡めて考えさせる。 | |
| | | 進路情報の収集、活用にふさわしい進路指導室・進路資料室を目指す。また、進路委員を通じて進路情報をタイムリーに発信する。 | 生徒アンケートにおいて、進路情報や資料が役に立った。<br>○80%以上：A　○70%以上：B<br>○60%以上：C　○60%未満：D | － | 結果報告は2学期生徒アンケートによる。 | A | | | 役立った、役立つものもあったを併せて85.8%であった。特に3年生では99.2%とその関心の高さが見られた。 | 情報の収集は受験には必須である。近年は紙媒体以外に、デジタル情報も多くなってきているので、その利用法を発信する。 | |
| | | 最新の進路情報の取得と生徒への適切な広報を目指し、進路指導部員のみならず関係教員に校外での研究会や説明会への参加を求める。 | 校外での研究会や説明会、オンラインでの説明会への参加回数が、<br>○参加30回以上：A　○参加20回以上：B<br>○参加10回以上：C　○参加10回未満：D | B | 研究会や説明会が徐々にではあるが実施・再開されている。その機を逃さず参加できている。 | B | | | コロナ禍の影響で、説明会・分析会とも開催が自粛されこともあり、参加数はコロナ禍以前の数には戻っていない。また、オンラインでの情報取得は不自由な面があり、研修機会は限られた。 | 例年並みに研修出来るよう、積極的に情報を提供し、意識の高揚をはかりたい。また、オンラインにある有益な進路情報を進路指導部が取得し、全体で共有できる仕組みづくりを進めていく。 | |
| | | 『進路の手びき』を全生徒に配布し、進路HRの資料として使用するなど、有効活用を図る。 | 生徒アンケートにおいて、『進路の手びき』が進路を考えるのに役立った。<br>○80%以上：A　○70%以上：B<br>○60%以上：C　○60%未満：D | － | 結果報告は2学期生徒アンケートによる。 | A | | | 役に立った、役に立つ部分もあったを併せて87.9%であった。より本校生に寄り添った編纂を加え、充実を図る。 | 生徒にとって必要な情報、興味を持つ情報を精選し、利用しやすくまた利用する気にさせるように内容を編集する。 | |

# 令和3年度 学校評価総括表（その4）

奈良県立生駒高等学校

| 評価項目 | 具体的目標<br>（評価小目標） | 具体的方策 | 評価指標 | 中間期（9月）<br>自己評価 | 中間期（9月）<br>進捗状況 | 年度末（3月）<br>自己評価 | | 年度末（3月）<br>成果と課題（評価結果の分析） | 年度末（3月）<br>改善方策等 | 年度末（3月）<br>学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人権教育 | 人権を尊重し、人権侵害や差別を見抜き、それらを解決する意志と実践力を育てる。 | 人権HR指導案作成に担任に関わってもらう。また、人権講演会の充実を図るとともに、「自分には何ができるか」を考えさせる取組を展開する。あらゆる場面において人権尊重の視点からの指導を行う。 | 3年最後のアンケートにおける、「いじめ」や「差別」に気づいたとき、どうしますかに対して、“見て見ぬふりをする”が<br>5% 未満 :A<br>15% 未満 :B<br>25% 未満 :C<br>25% 以上 :D | － | 3年アンケートは未実施である。 | B | B | 3年生の人権アンケートにおける「あなたは『いじめ』や『差別』に気づいたとき、どうしますか。」という設問に対して、『見て見ぬふりをする。』との回答が3.2%であった。しかしながら、4.3%あった『その他』という回答の中には、『場合による』とするものが多数あったことから、「人権を尊重し、人権侵害や差別を見抜き、それらを解決する意志と実践力」を持った生徒を育て切れているとはいえない。ただ、教員相互による人権HR指導案の作成は、人権HRの充実に確実につながっている。 | 担任の先生に指導案の作成をしていただくことは継続し、指導案作りに役立つ資料の充実に努める。 | 「いじめ」や「差別」に気づいたときの「見て見ぬをする」の評価がB（15%未満）であるが、絶対に「いじめ」や「差別」はあってはならないことである。違いを認めることの大切さをすべての教師と生徒が理解し、相手を思いやる心を持つよう努力していただきたい。 |
| | 自己理解を進めることにより、他者のことも理解する資質を育て、お互いを認め合う集団づくりを行う。 | グループワークを取り入れることにより、生徒が仲間との交流を通じて自分自身について考えながら仲間意識を高め、共に成長することを促すとともに、「いじめは許さない」という態度の育成に努める。 | 生徒アンケートにおいて、「なかまづくり」 が<br>“よくできた”が 80%以上:A<br>”よくできた”と“まあまあできた”とで 80%以上:B<br>”よくできた”と“まあまあできた”とで 70%以上:C<br>”よくできた”と“まあまあできた”とで 70%未満:D | B | 生徒アンケートにおいて、「なかまづくり」 が<br>“よくできた”が 53.6%<br>“まあまあできた”が 38.5%で、<br>”よくできた”と“まあまあできた”とで 92.1%であった。 | B | | 「なかまづくり」には、相手の立場に立って物事を考える感性と、意見の違いを認め、近づけ、一致点を見いだすコミュニケーション能力の育成が不可欠であると考える。HRの時間を核とした「なかまづくり」に、人権教育部としても一定の役割を果たせたと思われる。 | 違いを認めることの大切さに気づかせるとともに、相手の気持ちを思いやる想像力を高め、人権問題を自身の問題であると捉えさせる内容の作成に努めていく。 | |
| 人権教育<br>教育支援<br>（奨学金） | 奨学金指導を通して生徒の学習権の確保と進路の保障を目指す。 | 各種奨学金の情報を的確に伝え、応募手続きを指導する。特に希望者が増加している日本学生支援機構大学等予約奨学金については、人権教育部全員で対応にあたる。 | 生徒アンケートにおいて、<br>“大変よかった”が 80%以上:A<br>“大変よかった”と“まあまあよかった”とで 80%以上:B<br>”大変よかった”と“まあまあよかった”とで 70%以上:C<br>”大変よかった”と“まあまあよかった”とで 70%未満:D | B | 生徒アンケートにおいて、「大学予約奨学金に向けての説明会や手続きの進め方は、丁寧に行われましたか」 が<br>“大変よかった”が 47.6%<br>“まあまあよかった”が 46.3%で、<br>”大変よかった”と“まあまあよかった”とで 93.9%であった。 | B | | 高校奨学金・大学予約奨学金・その他の奨学金について、各学年・担任の先生方、また保護者の協力の下、すべて滞りなく説明・申し込み・返還指導等を終えることができた。 | 大学予約奨学金の事務手続きに関しては、保護者に対しても文書や電話等で丁寧に行っていきたい。 | |
| 保健体育 | 生徒の体力の向上を図る。 | 体を動かすことは心身の健全な育成にも大切であり、仲間作りにも繋がることを積極的に生徒や保護者へ啓発し、体育系部活動入部率65%以上とする。 | 体育系部活動入部率が<br>○65%以上:A ○55%以上:B<br>○50%以上:C ○40%未満:D | B | スポーツテストの結果より56.7%であった。 | B | B | 今年度はスポーツテスト実施時の運動部入部率は概ね目標を達成しているが、途中で退部する生徒も少なからず見られる。理由としては学業に対する不安が多いが、学業との両立を目指して欲しい。また部活動を続けることで、しんどいことから逃げず、最後まで続ける力を身に付けさせたい。 | 1年生には、入学後の早い段階で少しでも活動に参加できる取り組みを計画し、オリエンテーションで魅力ある部活動のアピールをしていきたい。また、部活動で身に付けた「粘り」を学業にも活かし、進路実現に繋げる指導をしていきたい。 | 中学生時代の大半をコロナ禍で過ごした新入生には、予想を超える体力の低下が懸念される。年度当初、生徒の様子を観察し、適切な指導を行って欲しい。すべての健康診断を実施できていないため、家庭での健康観察をお願いせざるを得ない状況である。健康への意識を高めるため、生徒、保護者への啓発を続けてもらいたい。 |
| | | 個人目標を持たせ，意欲的にスポーツテストが受けられるよう啓発する。また、スポーツテストの結果を活用し、体力向上を図る。<br>偏差値（Tスコア）3ポイント向上を目指す。 | Tスコアのポイント向上が<br>○3ポイント以上:A ○0ポイント以上:B<br>○−2ポイント以上:C ○−2ポイン未満:D | － | 新型コロナウイルス感染症の影響で、スポーツテストがまだ測定完了していないので、データが出せていない。 | C | | 昨年度と比較し<br>2年生男子 −1.9ポイント<br>3年生男子 −0.3ポイント<br>2年生女子 −0.7ポイント<br>3年生女子 −2ポイント 平均−1.2ポイント<br>今年度は、良い結果が得られなかった。 | 体育の授業において、今後も欠かさず補強運動を実施していく。運動が苦手な生徒には、授業で積極的に取り組んでいけるよう声かけを行う。また部活動の更なる活性化を進めていく。 | |
| | 健康管理の意識を高める。 | 健康診断の必要性を生徒だけでなく、三者面談等を通じて保護者に理解していただき、再検査・精密検査の受診率の向上を目指す。 | 検診後の再診、治療率が<br>○70%以上:A ○55%以上:B<br>○40%以上:C ○40%未満:D | － | 新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、健康診断が未測定で結果が出せていない。 | C | | 心電図A。視力・眼科・尿・内科はC。例年、視力・眼科・尿・内科はD判定だったが、今年は新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、病院受診を控える保護者がいたなかでDからC判定にかわったので治療率としては良かったと思う。 | 三者面談を通して治療勧告書を保護者に渡してもらっているので、HR、保健室来室時や保健だより・学年だよりなど折に触れ病院受診を勧めていきたい。 | |
| | 食育の意識を高める。 | 生徒が食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身に付けることができるよう積極的に啓発し、朝食の摂取率の向上を目指す。 | 毎日の朝食摂取率が<br>○90%以上:A ○80%以上:B<br>○70%以上:C ○70%未満:D | A | 1学期生徒アンケートより、毎日朝食を食べている生徒は、90.6%、食べないと回答した生徒は全体の3%である。食べない生徒を減らすよう、啓発を続けたい。 | A | | 昨年度と比較すると、朝食摂取率は向上している。全国平均と比較しても、本校の摂取率は良いが、朝食欠食の習慣が始まるのは、高校生からだとよく言われるので、社会人になっても良い習慣が続くよう、大切さを伝えていきたい。 | HRの体調確認時や保健・家庭科の授業等で折に触れ、規則正しい生活と朝食摂取の重要性を指導していく。 | |
| 環境整備 | 生徒自らが校内美化に積極的に取り組む姿勢を育み、減災に対する意識を高めさせる。 | 日々の清掃・美化活動のさらなる徹底を図り、避難訓練を通じて減災について考えさせる。 | 生徒アンケートにおいて、充実した清掃・美化活動を実施できたか、減災について意識しているかを問う。<br>60%以上でA、50%以上でB、<br>40%以上でC、40%未満でDとする。 | － | アンケートは年度末に実施予定 | A | B | 積極的に清掃・美化活動を実施している割合は、 80%を超えている。災害に対する意識は、避難訓練を行えていないこともあって、アンケートには入れていない。 | 三者面談前の廊下・トイレ清掃は、環境整備部の教員とクラブ員で行うようにしている。<br>南海トラフ巨大地震の脅威が迫っているので、機会を見て注意喚起する必要がある。 | コロナ禍において、全体での避難訓練の実施は難しいかもしれないが、学年単位でも良いので、ぜひ行っていただきたい。また、登下校時に災害に遭った場合の行動について話し合う機会を持ち、情報や知識を共有していただきたい。 |
| | | 通学路清掃の該当区域を広げることによって、地域とのつながりを意識した活動に発展させる。 | 美化委員に加え、有志の参加数が前年比<br>10%以上の増でA、5%以上の増でB、<br>同程度でC、減でDとする。 | － | 雨天のため、通学路清掃は実施できていない。 | D | | コロナ禍の影響で、美化委員だけが通学路清掃を行っている状況である。 | 通学路清掃を行っているが、ここ最近はあまりゴミが落ちていない状況で、近隣の公園等に清掃対象を拡げている。 | |

# 令和3年度 学校評価総括表（その5）

奈良県立生駒高等学校

| 評価項目 | 具体的目標<br>（評価小目標） | 具体的方策 | 評価指標 | 中間期（9月） | | 年度末（3月） | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 自己評価 | 進捗状況 | 自己評価 | | 成果と課題（評価結果の分析） | 改善方策等 | 学校関係者評価（結果・分析）<br>及び改善方策 |
| 特別活動 | 学校行事の実施について、新型コロナウイルス感染防止対策の施策の中で、できることとできないことを選択しながら、令和元年度以前の行事実施水準にできるだけ近づける。 | 最大行事の文化祭は、新型コロナウイルス感染症の感染状況を考慮し、安全性を確保し実施できる方法を検討する。文化鑑賞会も同様に、2回公演等を行い実施できるよう検討する。生徒総会は代議員会でこれに代える。選挙等その他行事も、放送設備を利用して行う。生徒と地域との活動は、本校生単独でも行うことができるものを模索する。 | 学校行事の実施が、昨年比<br>80%以上実施できたらA、<br>60%実施できたらB、<br>40%実施できたらC、<br>実施できたものが40%以下ならD。 | C | 代議委員会・生徒会選挙・各種委員会は実施できた。しかし,新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の面で、生徒の安全が確保できず、文化祭は中止となった。コロナ禍で、学校行事の実施を見据えた設備整備を検討したい。 | C | C | 生徒総会に代わる代議員会、生徒会選挙、各種委員会は、新型コロナウイルス感染症の感染防止の目的で参加人数を絞り実施でき、予算の執行等が恙なく行えた。文化鑑賞会は内容を少し削り、2回に分けて公演することで実施できた。反面、文化祭は当初計画した感染防止策では足りず、更に強化した対策を盛り込み、再度提案したものの、結局実施を見送った。各教室で舞台発表を見ることが出来ないこと、日程変更により、大学入試と時期と重なるため、3年生が積極的に参加できないことが原因であった。 | コロナ禍のような不測の事態であっても、文化祭等の全校体制の行事が体育館以外の場所でできるように、各教室への機器の整備やその選定に、担当部署等と協議をしながら、当局に予算等の要求をしなければならないと考える。加えて現存の機器を利用した行事遂行のための追加機器の整備に、生徒会予算の投入も視野に入れなければならない。また、日程の変更を当然のことと捉え、各担当が文化祭等に対するモチベーションを維持するための情宣活動に取り組まなければならない。 | 文化祭を2年実施できていないことは残念である。感染症対策を行いつつ実施できる方向を検討して欲しい。新入生の部活動への加入率を上げるため様々な取組を行っていただき感謝する。来年度当初も継続して実施してもらいたい。 |
| | 昨年度の新型コロナウイルス感染症の感染防止対策で、中学3年次のクラブ活動が制限されていた、現1年生のクラブ加入率の減少防止に尽力する。 | 4月当初は、例年と同じ勧誘活動を行う。また、第1学年に働きかけ、SHR等を利用してクラブ活動への入部を促してもらう。5月の時点で入部率が低い場合、クラス担任と協力しながら、未入部の生徒をピックアップし、個別に入部を促す。 | 部活動加入率が、昨年比<br>90%以上ならA、<br>80%以上ならB、<br>60%以上でC、<br>60%以下となった場合D。 | B | 概ね昨年並みと思われる。 | C | | 昨年並みの部活動加入率となったが、学校生活に対する意識が高い新入生の中に、全く何も部活動をしない生徒が少なからず存在している。また、本校の部活動に存在しない種目、分野の実践者が一定数おり、部を開設して欲しい旨の要求が2件ほどあったが、開設ルールの説明だけに終わった。 | 新しい部活動の開設は、国自体が現在の部活動を校外への移管の推進や、外部指導者の依頼を模索している状態では、大変困難と考えられ、推移を見守ることしか出来ない。またそれに伴い、将来的に部費や派遣費等の処置も、担当の部として模索しなければならないと考える。現状新入生に対して、今ある部活動への入部推進のため、4月の段階での文化クラブに、小さい発表の機会を設定し、活動を見る機会を確保したい。また、生徒会規約を改正し、生徒会役員の定員の流動化や立候補しやすい状態を作り、さらに積極的に役員が活躍できる場を設定できるよう努めたい。 | |
| 情報図書 | 学校からの情報発信に努める。 | Webページを定期的に更新し、最新情報を発信する。 | Webページの更新<br>○年間200回以上：A　○年間180回以上：B<br>○年間160回以上：C　○年間140回以下：D | D | 9月末日の時点でのWebページ更新回数は106回でした。 | B | A | 1月集計時点で、Webページ更新回数は170回であった。昨年度は2月と3月で約15回の作成実績があったので、1年間で約185回の更新予想である。今年度の月単位更新回数は、年度初めの4月が最も多かったのに対して、5、6月は一桁まで減った。一方、2学期は毎月一定数の更新があった。 | 日常業務の多さ、学校行事の実施状況、Webページを通じて、発信すべき内容、Webページへのニーズなどについて検討し、より積極的なWebページの活用を促進する。 | コロナ禍では、Webページからの情報発信が有効な手段となる。今後も積極的にWebページを活用して欲しい。いよいよ来年度より第1学年で、BYODによる授業での個人端末の導入がはじまる。新しい授業の形態について、研修を進めていただきたい。図書館の在り方について、様々な方策を進めていただき感謝する。 |
| | 生徒の読書活動を推進する。 | 朝の読書や読書感想文コンクール応募など読書指導を充実させる。計画的な広報活動を実施する。 | 貸出冊数年<br>○1800冊以上：A　○1700冊以上：B<br>○1600冊以上：C　○1500冊以上：D | - | 朝の読書週間(1学期)は実施。図書館便り(4,5,7月)発行。貸出冊数は、9月末現在で1,594冊である。 | A | | 「朝の読書」を各学期に2週間程度実施した。<br>「図書館だより」を印刷配布からデジタル配信とし、学校ホームページからの蔵書検索も実現できた。<br>図書委員活動を開始し、利用の促進を図った。<br>（図書委員選書・広報活動・放送部との連携・読書週間イベント・館内整備）<br>貸出冊数は、1/20現在で2,775冊（昨年度年間貸出冊数1842冊）である。 | 「読書センター」としての機能を充実させるとともに、「情報センター」・「学習センター」としても機能を果たすことができるよう、また「居場所（サードプレイス）」としての図書館であることも重視し、ICTへの対応や居心地の良さなどの環境面の充実や蔵書構成を考え、整えていきたい。 | |
| 事 務 | 学校運営経費及び光熱水費の適切な執行管理と適切な対応を行う。 | 今年度も1クラス増加しているが、予算内で光熱水費を執行できるよう節電・節水を行い、経費削減を行うよう教員への啓発を行う。特に漏水・漏電した時は速やかに対応する。 | 光熱水費が昨年度より<br>○−5%：A　○昨年並み：B<br>○+5%：C　○+5%より増加：D | D | 新型コロナウイルス感染症の感染予防で、手洗いが増えているため水道の使用量が増加した。電気もデマンド使用量制限を緩和したため使用量が増えている。 | B | B | 夏期休業が延長されたため、9月の電気水道の利用量が例年より減っている。日頃の手洗いを推進しているため、感染拡大は学校内では起こっていないと考える。 電力はデマンド値を上げたため使用量が増えてしまったが、厳寒期に教室が寒いとの声は上がらなかった。 | 新型コロナウイルス感染症の感染予防の手洗いなど、ある程度の水道使用はやむを得ない。電力についても夏・冬にエアコンを使用する時に換気で、窓を開けるため電力使用量は下げられないものと言える。感染予防に関係ない無駄な水道、電力を使わないように声かけは続けていく。 | 新型コロナウイルス感染症対策では、昨年度の教訓をもとに、今年度は適切にエアコン等を運用していただき感謝する。来年度も見通しがつかない状況である。今後も生徒の安全と健康に関わる事項を優先して改善に取り組んでもらいたい。 |
| | 新型コロナウイルス感染症に対して適切な対応を行う。 | コロナ対策費を活用し、新型コロナウィルス感染症の感染対策の徹底を行い感染予防に努める。感染予防に対しては教員からの必要品を聞き取り、コロナ対策費内で最も効果的なものを購入する。 | 準備状況<br>○順調に進められている：A ○概ね順調：B<br>○やや滞っている：C　○滞っている：D | B | 新型コロナウィルス感染症の感染予防のため、消毒用品や換気扇、カーテンの改修を行っている。 ウィルスの感染力の強いものに置き換わってきたため、教員・生徒に感染者は出たが、学校内では消毒につとめクラスターは発生していない。 | B | | コロナ対策費を有効に使って必要消耗品等を購入して感染を最小限にとどめていると思う。今後もあらゆる手段を講じて感染予防に努めていく。 | 新型コロナウイルス感染症の感染予防の日用品を的確に購入して感染予防に努める。また、感染予防の声かけを引き続きこまめに伝え、感染者が出てもアルコール消毒をして感染拡大を防止する。 | |